

図書館員の文献紹介と資料の活用

4月のピックアップコーナー

「児童文学」

————— 小澤文彦 27

本学図書館のスペシャル・コレクションより (41)

シーボルトの長男アレクサンダーが
玉井喜作に出会った話

————— 奥 正敬 28・29

マガジンラック (49)

「知っていますか?図書館の雑誌」

————— 栄 咲子 30

名作再読、拾い読み (31)

『悲しき酒場の唄』(1)

(“The ballad of the sad cafe”)

————— 小澤文彦 31

おこしやす、図書館へ

「言語学、はじめの一步 (23)」

————— 入学直哉、藤井達也 32

日本の歴史42

『江戸の食文化：和食の発展とその背景』

————— 稲垣宏行 33

Book Review Corner ————— 34・35

図書館利用案内

ライブラリー・カレンダー 2015 (4月～6月)

————— 36

●表紙で紹介する貴重書

ミラボー生誕300年を記念して



MIRABEAU, Victor R.
*L'ami des hommes, ou traité
de la population.*
[S.l.], [s.n.]. 1758-1760. 3 vols.
ミラボー『人間の友』

今年はフランスの重農主義経済学者ヴィクトール・ミラボー (1715-1789) の生誕300年にあたります。彼はプロヴァンス州に生まれ、青年期にはポーランド継承戦争に参加したと言われています。その後は農業理論を執筆し小農法の有利性にこだわっていました。

彼の代表作と見なされる本書『人間の友』は1756年から1760年の間に出版されました。この3巻本は新版で全6部で成っています。1部から3部までには「人口論」の副題が付いており、彼はこの3部で、「富は人口から派生する」とする考えを基盤にしていました。しかし、途中で重農主義経済学者のフランソワ・ケネーから批判を受け、それ以降は、「重視すべきは人口よりも富であり資本である」とするケネーの考えに移っていきます。このため、本書はミラボーが小農法から大農法へ変化した背景が窺えるものとされています。こうした本書は人気をよび、ミラボーを「人間の友」と呼ぶ風潮が生まれたそうです。

ミラボーはその後、ケネーの門下で師匠の『経済表』の解説に力を注ぐと共に、特に『租税論』では統制経済体制を厳しく批判しています。また、穀物流通の円滑化のため独占体制の撤廃を説くなど、現在の農業政策にも通するほどの理論を展開しました。(椿)

原寸 26.1×21.2cm (3巻共)

本書はスペシャル・コレクション
「世界を変えた科学理論」

に含まれています